



さざんか

かとう学園 宗像市立河東中学校
学校通信第49号(R6. 2. 22)

玄海ジュニア・ラグビークラブ所属の藤田琉生さんと西端湊美さんが宗像市役所を表敬訪問し、全国大会の報告を行いました



福岡県選抜に選ばれた玄海ラグビークラブのメンバー。
右から3番目が藤田さん。左から2番目が西端さん。

以前、本紙で紹介していましたように、本校で玄海ジュニア・ラグビークラブに所属する9年生の藤田さんと8年生の西端さんは、年末に行われた全国ジュニア・ラグビーフットボール大会に福岡県代表として出場しました。男子は見事全国優勝し、女子は準優勝という素晴らしい結果を出しました。

2月19日(月)、その結果報告のために宗像市役所を訪問しました。



高宮教育長から記念品を贈呈され、代表して受け取る西端さん

授業研修の風景

今週は、3本の授業研修を行いました。そのうちの2本を今回紹介します。どちらも、8年生の道徳科の公開授業です。河東中では、道徳科の研究にも力を入れていて、先生たち全員が年1回道徳でも授業公開を行っています。

碓先生(道徳)

2月21日(水)8年5組で行われた碓先生による道徳の公開授業。「注文をまちがえる料理店」という現実にある認知症の店員さんの多いお店の話です。



共生社会をどう実現するかというテーマで、料理店のコンセプトについて考えましたが、8-5の生徒は班の中でも全体でも積極的に自分の考えを発表できることがとても印象的でした。碓先生は、社会の事象で考えたことを自分のクラスに反映させて考える試みを行い、生徒も活発に事例を出し合っていました。クラスの親和性が感じられる授業でした。

甲斐先生(道徳)

2月21日(水)8年1組で行われた甲斐先生による道徳の公開授業。列車内で席に荷物を置いた女子生徒とそれを指摘するおじいさんとのやり取りをめぐる題材でした。

日常、列車内でありがちな席をめぐるいざこざ。社会生活の中で、みんなが気持ちよく過ごすためにはどうしたらよいかを考えました。8-1の生徒はルールやマナーについて活発な意見を出し合いました。さらに、研究主任である甲斐先生と8-1のすごいところは、わかっているけどできてないのはどうしてなのかまで、人間の心の裏まで踏み込んで考えようとしたところです。



「世の中で一番大事なことは人のためになることだ」 ～大村智さんがノーベル賞を受賞し、4億人を救った背景～

2015年にノーベル医学・生理学賞を受賞した大村智さんは、「4億人を救った日本人」と世界で称賛されています。大村さんが半世紀前に発見し開発したイベルメクチンという特効薬のお陰で、アフリカのオンコセルカ症で苦しむ人々が救われました。今回は、大村智さんについて紹介します。

かつて、アフリカ大陸で暮らす人たちの多くの人を絶望の淵に陥れた感染症であるオンセルコ症。感染者の99%はアフリカ大陸の人たちです。



この病気は、ブト（関東ではブユと言う）というハエのような吸血性の昆虫に刺されると発病します。ブトを介してマイクロフィアという病原菌が人体で発症すると失明します。オンセルコ症によって何億人もの方が視力を失いました。視力を失ったことで農業ができなくなったり工場で働けなくなったり経済的な打撃も受けて来ました。以前は、アフリカの集落の5人に1人がこの病気のために目が見えなくなったといえます。

このアフリカ大陸で猛威を振るったオンセルコ症の特効薬をつくりあげたのが日本人の大村智さんです。大村さんの薬学研究はたいへんユニークなもので、微生物から感染症の薬を開発しています。役に立ちそうな微生物を土の中から探し回ります。だから、いつもポケットの中には小さなビニール袋を隠し持って、手には採集用のスプーンを持って全国を飛びまわっています。

オンコセルカ症の特効薬であるイベルメクチンは偶然から発見されました。ある日、いつものように土の中にいる微生物を探すため、静岡県伊東市にあるゴルフ場の土を採取しました。その土の中から放線菌という微生物をたまたま見つけ出しました。その菌をアメリカの製薬会社であるメルク社とタッグを組んで新薬開発し実用化させました。そして、1979年にイベルメクチンという名称で発売が開始されました。WHO（世界保健機構）を通してアフリカには無料で支給され、劇的な効果を発揮しました。この薬は、副作用もなく非常に安全な薬とされています。これまで数億人が服用し失明を免れてきました。

大村さんはある講演会でこの薬を開発した精神的背景を語っていました。大村さんが、医学によって多くの人を救いたい、そのために微生物を研究し世の中のために役に立ちたいと思っているのはなぜでしょうか。それは、小さいころ、おばあちゃんが繰り返し話してくれた言葉にあるそうです。講演会で大村さんが語ったことを引用します。

『子どものころ、最も影響を受けたのが、農作業で忙しい両親の代わりに十歳まで面倒を見てくれた祖母でした。私はこの祖母から「**世の中で一番大事なことは、人のためになることだ**」と繰り返し繰り返し聞かされて育ったのであります。』

大村さんは、日本中の土の中から微生物を集めながら、顕微鏡をのぞきながら、何千回も何万回も心の中で幼い日のおばあちゃんの言葉を反復したことでしょう。その中からイベルメクチンが生まれ、何億人も目の命を救ってきました。

土の中にはたくさんの微生物がいます。スプーン1杯の土に1万種類、100億もの微生物がいると言われてます。最後に、大村さんの微生物愛に満ちた言葉を紹介いたします。

「私はいつも、我々の必要性や問題の答えは自然の中にあると思ってきました。微生物は無駄な代謝物を生産しない。微生物は十分に研究し尽くされていませんし、見方によっては研究は始まったばかりと思っています。微生物は地球のあらゆる天変地異に耐え、今日まで生き残った。微生物から学ぶことがいっぱいある。私よりも微生物にノーベル賞を。」